

# 「水辺」の開拓史 近世中期における掘り上げ水田工法の発展とその要因

The History of the Development of "Waterfronts"

## 菅 豊

### ①問題の所在

### ②掘り上げ水田工法の分布

### ③掘り上げ水田工法の展開の歴史

### ④掘り上げ水田工法の効果

### 結論

### 【本文要旨】

日本の低湿地帯において、1960～1970年頃まで、ホリタ、ホリアゲタなどと呼ばれる掘り上げ水田が存在した。それは低湿な地面、あるいは湖底の泥土を掻き取ってかさ上げし、また、同時にできる溝渠（堀潰れという）によって排水路を確保する開田技術である。湖沼河川の延長線上にある、あまりにも低湿な土地を開墾するために、泥土を掻き揚げ、かさ上げし、一方、泥土をとった部分は逆に掘り下げられ水面に没する。その水面と残された水田は、ちょうど橋状の特異な景観を構成することとなる。当然、水面下の部分での耕作は不可能となるが、一方、水田部分は標高を保つことができ、過剰な水を排すことが可能になるのである。

この掘り上げ水田工法は、その分布と発展の歴史から、もっぱら浅い沼澤地の底土をもって昇級した水田開発型と、一度陸地化した水田自体を削ってまで昇級した水田安定型に分けることができる。この違いは、「水辺」の開発段階に置き換えることができる。すなわち、前者は、少しでも水田を切り添えしようとして「水辺」に進出し、湖沼縁辺低湿地を開発し、水田化を目指す開発初期の段階に最前線で直接展開されるもので、後者はすでに「水辺」を改変して水田化した次の段階で、元に復して低湿地化しやすい環境（低湿水田）を、限定的な水田として維持することを目的としたものである。この二つのタイプは、低湿な環境を水田として利用するための共通した技術として扱うことができるが、その工法の採用の動機づけには大きな違いがある。さらに、前者の技術の登場年代についてはそれが定まらないのに対し、後者の発生は中世を否定できないものの、積極的に活用されたのは近世中期以降である。その時代が低湿地帯の新田開発と軌を一にすることは注目に値する。